
死ノ舞ウ夜ニ 前夜祭

緋澄 涼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死ノ舞ウ夜二 前夜祭

【Nコード】

N1268B

【作者名】

緋澄 涼

【あらすじ】

漆黒の髪に紅い瞳、血のような深紅のロングコートを着た【請負人】月詠咲夜。【嗤う死神】の異名を持つ咲夜は寄せられた依頼を完遂することが出来るのか？

第零夜 嗤う死神

妖しく煌く月の下、死神はたった一人嗤ってる。

彼を満たしてくれるのは明確な殺意と暴力だけ。

彼が満たしてくれるのは絶対的な死と暴力だけ。

妖しく煌く月の下、死神は今夜も一人で嗤う。

第零夜 嗤う死神

薄暗い闇の中で金属同士がぶつかり合う音が鳴り響く。
その応じて飛び散る火花が両者の顔を明るく照らします。

「はあはあ、なかなかやるじゃない【嗤う死神】」

黒い髪に藍色の瞳の凜々しい顔をした女性が漆黒の剣を翻しながら
続きを言う。

「でも、勝つのは私よッ!!」

そう言って剣を振るうが【嗤う死神】と呼ばれた黒い髪に赤い瞳を
した少年は
口元を歪めて嗤いながらその攻撃を軽々と避けた。

「いやはや流石は【協会】だ。こんな素敵なお嬢さんを送ってくれ
るなんてね。」

「あら、随分と余裕そうじゃない？」

黒髪の女性【ルイズ・ルブラン】は剣を構えながら問いかける

「いやいやこれでもなかなか大変さ。なんせこの三日で30人以
上の

魔術師達に襲われたんだからねえ全く。」

「あら、その魔術師達を皆殺しにしておいてよく言っわね。」

「全く以って困ったものさ。どいつもコイツも程度の低い烏合の衆だし。」

しかも数だけ揃えて見苦しい事この上ない。」

そう言って黒髪の少年【月詠咲夜】は顔を顰める。

「だが、だが君は違うのだろうとお嬢さん？

君はあんな雑魚達とは違っつて俺を愉しませてくれるんだろう？」

「フフフ、愉しませてあげるわよ【嗤う死神】

この【黒の魔剣士】たる私がね。」

「「じゃあ、殺し合いを始めようか」「」

死神と魔剣士の出会い
そして、物語の始まり

第零夜 嗤う死神（後書き）

初投稿ですから拙い所もありますが寛容な目で見てやってください。
後内容少し短いですがプロローグなので勘弁してください。

第一夜 契約

踊る、踊る、死が踊る

飛び散る血飛沫、断末魔の絶叫

轟く銃声、肉を刻む刃の音

響き渡るは不協和音の狂想曲

今宵この地は死が舞い踊る

死ノ舞ウ夜ニ 前夜祭

第一夜 契約

フランス パリ

世界で最も美しい通りといわれるシャンゼリゼ通りをやたらと人目を引く

血のように真っ赤なロングコートを着た16、7歳ぐらいの少年【月詠咲夜】

が歩いている。通りを歩きかう人たちは咲夜の服を見て一瞬顔を顰めるが

直ぐに忘れてしまったようにまた前を向いて歩いてゆく。

咲夜は並木道をしばらく歩き凱旋門を見た後通りにあるカフェに入っていた。

店内は洒落た置物が飾られ全体的に白に統一された清潔感溢れるなかなか洗練された

お店だった。店内に入り咲夜はある人物を見つけて真っ直ぐに奥のテーブルに向かって

歩いていった。

「よく来てくれたわね【嗤う死神】」

「俺の名前は月詠咲夜だよ【黒の魔剣士】。お仕事のパートナーなんだから

ちゃんと名前で呼んでもらいたいな。」

そう言っつて咲夜はニコツと笑う。

「それもそうね。私の名前はルイーズ。ルイーズ・ルブランよ咲夜君。」

そう言っつて軽く微笑んだルイーズはカップに注がれた珈琲に口をつける。

「で、仕事を頼みたいっつて言っつてたけど内容は？」

「簡単に言えば私が協会から【あるモノ】を盗むのを手伝っつてもらいたいの。」

運ばれてきたブラックの珈琲を一口飲んでから咲夜が尋ねる。

「……詳しく詮索するつもりは無いけど君は協会の人間じゃなかつたのかい？」

「ええ、私は協会に所属する魔術師よ。」

「……裏切るのかい？」

「ええ、ちよつとワケありでね。」

「はあ、まあ君の理由が如何であれ仕事を引き受けると言っつた以上俺が横からごちゃごちゃ言っつのもアレだしねえ。」

「理解がある人でうれしいわ。それじゃあ、報酬についてだけど、いや」

報酬はいいよ。」「・・・へ？」

「俺はねお金や名誉なんて興味がない。ただ、ただその仕事の課程が
愉しめればそれでいいんだ。」

そう言つて咲夜は嗤う。さっきまでの綺麗な笑みとは全く別の口元
を歪めるような

嗤い方。咲夜の特徴的な紅い眼はキラキラと輝きルイズの顔を映
している。

「・・・え、ええ貴方にも愉しんでもらえる内容だと思うわ。」

「じゃあ契約成立だ。ああ、そういえばこれから人に会う約束をし
てたから

俺はここで失礼させてもらうよ。じゃあ詳しいことはまた今度ね。」

そう言つて最初と同じような綺麗な笑顔を浮かべると失礼と言つて
去つていった。

第二夜 狩人

白銀の銃弾は貴方の心臓に、黒金の刃は私の心臓に
流れ出る鮮血が貴方と私を繋ぐ

そこに差異は無く貴方と私は血溜まりの中で一つになる

死ノ舞ウ夜二 前夜祭

第二夜 狩人

咲夜はただ一人道路を歩いている。陽はもう沈み辺りは薄暗くなっている。
だが薄暗いからといって人が全くいないのはおかしい。静まり返った町並みは

まるで住民が全て死に絶えたかのように咲夜の足音意外全く聞こえない。

「やれやれ、いい加減出てきたらどうだいシャル？」

咲夜がため息混じりに呟いた瞬間、建物などの影が一箇所に集まりそこから黒い

ドレスを着た銀色の髪に紅い瞳をした美しい女性が現れた。

「あらあら咲夜つたらつれないわね」

咲夜しかいない静まり返った町並みに銀髪の女性【シャルロット・ベルナル】の
声が響く。咲夜は呆れたような表情をしてまた大きなため息をついた。

「ハア、わざわざ人払いまでして一体何の用？」

「むう、ちよつと聖堂会のやつらにちよつかい出してたら私を追ってる狩人の
やつらにバレちゃってずっと追いかけてるのよ。全くあいつら
もいい加減
しつこいっいたらありゃしない。」

「追っ手なんて始末すればいいだけじゃないか。」

咲夜が肩を竦める。

『追っ手を始末する』それはいたって簡単なことなのだ目の前の美しい女性にとつて。

【紅い地獄】と呼ばれ恐れられている吸血鬼の彼女にとって。

「それが簡単にはいかないのよ。どこから持ってきたのか知らないけど

最高位の退魔装備に身を包み、教会に祝福された銀の剣や銀の銃弾を全員が

装備してるんだからたまったもんじゃないわよ。」

「へえ、それはすごい。まるで【奴ら】の再来みたいだ。是非一度会って殺しあってみたいものだよ。」

咲夜が冗談めかして笑っていると背後から背筋が凍るような張り詰めた殺気が

漂ってきた。振り返ると100メートルほど先の建物の陰に顔を隠すような黒いローブを

着たやつらが10人いた。どいつも手には銀の剣や銃を持っていて注意深くこちらを窺っている。

「・・・やれやれ噂をすれば何とやらつてところかな。」

そう言つて肩を竦めると咲夜はコートのポケットの中から一振りのナイフを取り出した。

ナイフは刃渡りが10センチぐらいの飾り気の無い少し無骨などこにでも売っているような

普通のナイフだ。そのナイフが今出たばかりの淡い月の光を反射してきらきらと輝いている。

「あらあら、ヤル気満々ね?」

「まあ、ねッ!!!」

咲夜は姿勢を少しずらし一気に走り出す。そのスピードは一般人では視界に捉えることも不可能なぐらい速い動きだ。そして咲夜は狂ったような笑顔を浮かべ一瞬にして隠れている奴らとの距離をゼロにした。黒いローブ達も100メートル先にいた標的が急に目の前に現れて少し動揺するがすぐに手に持つ武器で反撃する。辺りに銃声が響き渡るが咲夜は相変わらず嗤ったままで傷一つ負っていない。

「・・・遅いよ。」

咲夜の姿はフラツと一瞬残像を残して消え次の瞬間には黒いローブ達の後ろに現れる。すると少し遅れて鮮血を撒き散らしながら五つの首が宙を舞った。

「さあ、かかってきなよ？ 惨劇はまだまだ始まったばかりだ。ククク、アハハハハハ！」

狂ったような嗤い声を上げて咲夜は腹を抱えてひたすら嗤う。綺麗な口元も醜く歪み特徴的な紅い瞳はギラギラと輝いている。敵を殺してその血溜まりの中で嗤うその姿はまさに【嗤う死神】そのものだ。

「ク、ククククク、どうしたんだい君達がかかってこないのかい？」

一瞬で仲間の半数を殺され呆然としていた者達がふと我に振り返り自分達が持つ得物を強く

握り締め一斉に咲夜に向かって飛び掛っていった。
だがどの攻撃も当たる寸前で悉く回避されまたは捌かれて咲夜まで
は届かない。

「君達の力はそんなモンかい？・・・あんまり弱いと勿ねちゃ
うよ？」

咲夜が呟いた瞬間また一つ首が宙を舞った。

残された四人の黒いローブ達は懸命に攻撃を続けるが全く当たらない。

しかも、ボルテージが上がるようにどんどん咲夜の動きは速さを増
していく。

はじめは何とか咲夜の動きを捉えることが出来ていた彼らも今では
その動きを

視界に捉えることすら出来ていない。

「・・・そろそろ終わりにしようか。」

自分に触れることすら叶わない黒いローブ達に飽きたのか咲夜は少
し声のトーンを落として

ナイフを低く構える。そしてスツと手が動いたと思つた瞬間残りの
四つの首も宙を舞っていた。

「・・・終劇、だね。」

さっきまでとは違い少し冷めた眼で呟いた後咲夜は空を見上げた。
蒼白く煌く月は吸い込まれそうなほど美しく、と、とても、とて、
も腹部、が熱、熱い
そして、・・・痛い

「……………!？」

咲夜の腹部からは見事に銀の刃が生えており溢れ出る熱い血が深紅の
コートを更に
紅く染め上げていく。

……………振り返るとそこには先程首を刎ねたはずの一人が全く無
傷で立っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1268b/>

死ノ舞ウ夜二 前夜祭

2010年10月9日22時59分発行